

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## ことばのサーモグラフィー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中西, 進 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://repository.ninjal.ac.jp/records/2056">https://repository.ninjal.ac.jp/records/2056</a>

# ことばのサーモグラフィー

中西 進

テレビや雑誌などで、温度を色別に示す図像をよく見かける。サーモグラフィーとよばれる方法である。

ことばもこの方法で分析できないものか（すでにあるのかも知れないが見たことがない）。つまり私は、ことばにも温度差があると思うのだ。それが明らかに示された時、人びとは改めて発言の仕方や文体、さらに広く、人間にとって言語とは何かを重大に考えるのではないか。自分のことばが、こんなに暗いブルーだったのかと気づいた時、その人は発言をどう考えるだろう。反対に自分に寄せられたことばが、これ程濃い赤だと知った時、その人は発言者をどう思うだろう。

さしずめ総理大臣の「日本はカミの国だ」ということばをサーモグラフィーにしてみたら、何色になるだろう。それを徹底追求するといった野党党首のことばはどうか。

じつは今、私は裁判に巻き込まれていて、提出材料をととのえなければならぬ。材料とは、時系列に並べられた、事実のみを記す文書である。

これを作ろうとして、私は改めて日頃の生活がいかにあいまいであるかに気づいた。記憶は時系列とは無関係に強弱によって並んでいる。日常生活のことばがもつ想像力や表現力をすべて排除して、事実のみを無機質に書き出す。これが裁判にとって最良のことばである。

しかし一方、日常生活のことばはあいまいながら、単語から文体まで、その人の人格の総量を担っている。つなぎにアーという人ウーという人、はたまたエートエートという人。

文字ことばだってやたらに装飾が多い人と必要なことしか書かない人がある。アクの強い文体を独特の文体だと褒めてもらって文壇を闊歩する人。こうした、いわば体感をそのまま持ちこんだことばは、日常生活ではおそらく一番自然なことばだろう。極端ながら、井戸端にとって最良のことばである。

これら裁判ことばと井戸端ことばとのサーモグラフィーがどうなるか、私の予測は書くまでもない。

もう一つ、手書きことばとワープロことばもサーモグラフィーにしてみたい。

「つれづれなるままに日ぐらし硯に向」って書いた文章は、呼吸のリズムに随っているだろうから、一人称のことばである。文は人なりという、そのままの表現が続く。

ところがワープロは推敲自由が売り物で簡単に文章がいじれる。いやいじるつもりがなくても画面に出たものをまるで他人事のように眺める立場に立たされ、反省したり、構成したりする。我ながら二人称のことばになってしまう。

ワープロことばは手書きことばより、よほど賢いはずだが、さてこれらもサーモグラフィーでみると、色はわかりきっているように思う。

会議の席にもこの機械を置いてみたい。Aさんは赤い発言をした。Bさんの発言は青だ、とたちどころに解る。いや案外、誰さんも誰さんもみんな発言は玉虫色かもしれない。